

単独行を考える

登山情報誌『山と溪谷』2月号の特集記事は、「単独行の登山術」であった。中高年登山リーダーの一人であることを自認する筆者としては、単独行の是非についてこれまで非の立場を取っていた。「単独行は止めましょう」というのが、登山界の立場であると認識していた。雑誌で単独行が特集されたり、単独行を勧めるような本の出版には一人で憤慨していた。そこにもってきてまたまた単独行の特集、早速「単独行は止めましょう」という論陣を張るべくペンを執ったところ、「待てよ」という思いが心の片隅に湧いたのだ。

なぜ「単独行は止めましょう」なのかといえば、単独行はリスクが大きいからだ。山岳遭難事故が最悪の結果に至るケースは、単独行が圧倒的に多い。その事実は自明といえる。安全登山を考えるなら単独行は非、そのようにアドバイスしてきた。

前述のリスクについて、特集記事の一項「単独行のメリットとデメリット」に「山岳遭難における単独行とパーティの比較」があり、パーティでは遭難件数の51%が無事救助、負傷が42%、死亡・行方不明が7%であるのに対し、単独行ではそれぞれ、48%、32%、20%、死亡・行方不明は単独行ではパーティの約3倍になっていて、単独行のリスクの高さが証明されている。

他方、単独行のメリットとしては、①自分の実力に見合った（好みの）プランニングができる。②自分のペースで歩ける。③自由にルートを変更できる。④慎重になる、が挙げられている。これで、単独で登っている人の多いことの説明がつく。ルポ「ひとりで山を歩くということ」には、「コース変更も気ままにできるし、『充分楽しんだから、今回はこのくらいにしとこう』と誰に気兼ねすることなく中断できる」「北鎌尾根のような最初から最後まで緊張感が連続するルートでは、独力で登り切ったという充実感がこたえられない」と、単独行のメリットを語っている。「リスクがあるから自分を磨ける」という考えもある。

単独行のメリットがこれだけあるのなら、デメリットの側に立って単独行を非とするのではなく、是とした上で、単独行の問題点を解決する方法を考えていくことが、実情に合うのではないかと考えるようになった。是とすれば、2月号の特集記事にうなずく点が多くなる。「単独行の登山術」とは、リスク回避にほかならない。

「アタシを山に連れて行って」という初心者が多いようだが、他人に連れて行って貰う登山は、単独行の対極にある山の登り方ではあるまいか。リスクがない代わりに、①自分でプランすることはない。②自分のペースで歩けない。③自由にルートを変更できない。④状況判断の必要がなく、慎重にならずに済む。連れて行って貰う登山では、登山は学べないのだ。登山を学びたかったら、自分を磨くリスクがある単独行にチャレンジしてみるっきゃない。高尾山あたりから始めてみたらいかがだろう…。